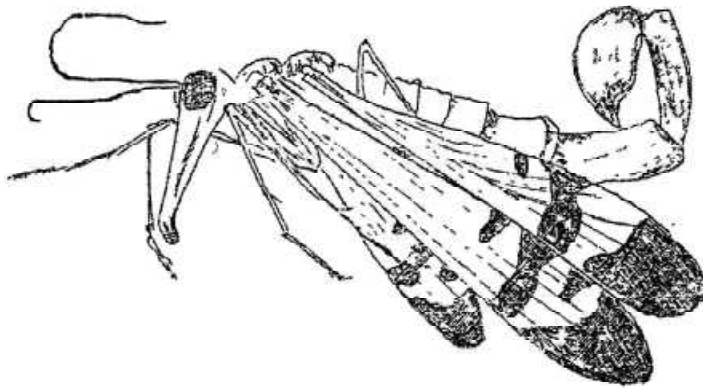

すずむし

Vol.2 No.10

1952年10月



倉敷昆虫同好会

目次

	頁
● 本州にダイズクヌモグリバエ 小泉憲治, 安江安宣	1
● 倉敷産ラミーカミキリ小記 広瀬義躬	2
● 南方紀行 (3) 黒田祐一	5
おとしづみ	
○ <i>Neptis</i> 属2種の訪花資料 広瀬義躬	9
○ ナガサキアゲハ広島市に産す 永野弘造	10
○ トンボがセセリチョウを採る 近藤光宏	10
○ 金山に多産するヤホシゴミムシ 広瀬義躬	10
○ シロスジコガネを採集す 広瀬義躬	11
○ ヒカゲチョウ燈火に飛来 小野 洋	11
○ ホシミスジの蛹化部位 広瀬義躬	11
○ 観察メモ3題 広瀬義躬	11
同好会御紹介, 蝶類同好会お知らせ	12
会だより	13

本州にダイズクキモグリバエ

小泉憲治、安江安宣

ダイズクキモグリバエ *Melanagromyza* sp. は昭和21年、小林政明氏⁽¹⁾によって記されたのが最初で、成虫の体長約2mmの小さな蠅で大豆の莢葉に1粒卵を産みつけ、これより孵化した幼虫は葉肉中に這つて葉脈に這し、ついで葉柄及莖内の維管束の部分も被害するため、大豆の葉が黄変して生育を抑制され、健全な株に比較して著しく莖丈が低くなる。幼虫は老熟すれば莖内で化蛹し、葉柄の基部又は根際⁽²⁾の脱出孔から羽化して出てくる。

この害虫については湯淺啓温⁽²⁾、飯島鼎⁽³⁾両氏も大豆害虫の総論中で一寸觸れておられるが、今まで九州地方特に南部の熊本、宮崎、鹿児島⁽⁴⁾の諸縣において大豆の害虫として知られており、同地方では甚しい時には100%被害⁽⁵⁾をうける年もあるということである。又本年1月には四國からも報告⁽⁶⁾があった。

因みに古い記録としては明治14年に第2回内務省農務博覧會が開催された折、康覽品説明のために「害虫図解説」なる小冊子が印刷され、該書中で練木喜三氏⁽⁷⁾が大豆の害虫として「大豆の此害を免けるや日ならずして枯凋す」と記しているが、これが果して今日吾人の云うダイズクキモグリバエを指すものであるか否かは尙考證の餘地があるが、一應興味の花かれる記事ではある。

ところで著者の1人小泉は去る8月、岡山大学農務部附属農場において始めて成虫を捕獲し、秋大豆が相當本害虫によって被害をうけ萎縮、短大化しているのを発見した。

その後著者の1人安江の調査によると岡山市近郊のみならず倉敷市、玉島市、津山市の3市を始め、都窪郡茶屋町、常磐村、児島郡瀬崎町、八雲町及兵庫縣姫路市の農林省中國農業試験場の附近等の諸地奥でも採

集されたが、恐らく瀬戸内海沿岸地帯には既に故人分布している老のと思はれる。尚大豆のみならず小豆も此の害虫に侵かされ同様の被害を呈する。

最後に農林省中国農業試験場の岡本大二郎技官からの来信によれば同場萩野技官は既に昭和24年同地において本害虫を認め、若干の調査を行つたが公表することなく今日に至っている由、又鳥取農環の上田博徳氏も亦鳥取地方に於いて気付いておられた由である。こゝに貴望な資料を寄せられた岡本大二郎氏に厚く御禮申上げる次第である。(1952, Ⅹ; 28)

引用文献

- (1) 小林政明(1946): 大豆と小豆, 産業図書株式会社刊。
 - (2) 湯淺啓温, 川崎倫一(1949): 農學, 3巻5号, 20。
 - (3) 飯島 鼎(1951): 農業及園藝, 26巻1号, 159~162。
 - (4) 末永一他3名(1951): 九州農試報, 1巻1号, 78~79。
 - (5) 古谷義人, 久木井甚二(1952): 九州農業研究, 9号, 27~28。
 - (6) 遠山長和, 八條田福一(1951): 九州製菓研究, 8号, 113~114。
 - (7) 古谷義人, 久木井甚二(1951): 九州農試報, 1巻13, 126~127。
 - (8) 石倉啓次他3名(1952): 中国四國農試報告, 1巻1号, 134~150。
 - (9) 緑木喜三(1881): 第2回内國勸業博覽會害虫図解説, 34。
- 【追記】分布地帯に東京都池田谷区用賀町(1952・Ⅹ・6, YASUE)を追加す。

倉敷産ラミーカミキリ小記

広瀬義躬

倉敷に於いてラミーカミキリ *Paraglenea fortunei* SAUNDER の発生が確かめられたのは最近の事であつて確か1950年清音村黒田に於いて山川宗平先生等の手で発見された老のと思う。この南方系の美しいカミキリは筆者もよく網にしてその生態を調べて見たいと思つてはいたが本年当初越冬中の本種幼虫が本会の小野、青野、近藤の三氏

によって発見され筆者もその佐藤栄吉氏より少し知見を得たので他の事項と共に参考的に記して置きたい。本稿の一部は「新昆虫」ムシペンに投稿中であるのでその方と大が重複すると思うが更に詳く述べるつもりである。本稿を記すに当って佐藤御教示いただいた近藤光宏氏に対し厚く感謝の意を表する次第である。

I) 分布 —— 倉敷附近に於ける産地はいずれも市の西北部黒田附近に限られている。未だその他の地で採集されたのを聞かない。本種の食草たるヤブマオは随所に生育している。

産地としては次の2地を数えるに過ぎない。この地に於いては多数の本種を見る事が出来る。

- | | |
|-------------|-----------|
| 1) 倉敷郡清音村黒田 | 1950年より発見 |
| 2) 倉敷市酒津水門 | 1951年より発見 |

II) 出現時期 —— 5月下旬よりその発生を見7月を過ぎるともう姿を消してしう様である。最盛期は6月上旬へ中旬である。

III) 食草 —— 従来の本種の食草としてはラミーが知られているがしかし当地方においては黒田附近に多数の発生を見るのに老がわからずラミーは栽培されておらず当然ラミーと近縁のヤブマオ属(*Boehmeria*)がその食草として予想されていたが前述の如く本年(1952)1月1日清音村黒田に於いて本種幼虫がヤブマオの枯莖中より発見され筆者も翌日同地に採集を試みて幼虫を採集自地に於いて飼育を行いヤブマオを与えたところよく攝取し惜しくも蛹化に至らず死亡したが近藤氏は同様に飼育して羽化させておられる。よってここに本種の食草としてヤブマオ *B. japonica* Miq. を記録する次第である。本種の食草としては従来ラミー以外に記録がなく只成虫がムクゲの新葉を食することが知られているのみである(1. 東正雄(1948): ラミーカミタリ *Paragloea fortunei* SAUNDERS の発生と食性; 新昆虫 1(9) p. 42. 2. 佐々木恭(1950): ラミーカミタリの食餌植物についての疑問; 生態昆虫 3(8), p. 55.). なお本種成虫は発生地に於いてはヤブマオの葉上に多数発見出来るもので幼虫と同様ヤブマオを食餌とし表面から網

自然に死んでいる。

IV) 越冬 —— 本種の生活史は台湾に於いては既に解明されたところであるが本州に於けるその生態については未だ知られていない。従って台湾と気候的に異なる本州では越冬という問題が考えられるがこれも全然判明していないのである。このような状態であるので本種の越冬態を正確な記録がなく本種の食草として従来知られるラミーそのものが本州では主に栽培品として本種の越冬前に収穫されての経路を抜きとられるため、産卵期が6~7月以降では幼虫態で越冬することは困難で年内に羽化し株中にて越冬、翌年外節に脱皮することのしるしは知られていない(林匡夫(1948): カミキリムシの語; 虫塚昆虫館報44 p. 15)。又小西泰氏(1950)もこれを引用して本種が成虫態で越冬することを推定している(新昆虫3(1)ムシペン)。しかし前述の如く冬々ヤブマオ枯茎中にて越冬中の幼虫が多数採集され越冬の一頭飼育を続けただが3月下旬死亡失敗した。近藤氏はその後老飼育を続け22/IV羽化11/V羽化1名の記録を得られた。野外に於いてモヤブマオは冬々地上茎は枯死するが地中の茎は春への溜みを経て居り充分攝食し越冬することが可能である。この点最近本州各地で見られているのは附近にラミーがある所が多いらしくラミーの場合幼虫越冬ではいかなることになるか甚々興味ある点であろう。越冬中の幼虫は多く根元より10cm内外に位置し中令乃至老令と属されるものが大部分で幼虫はほぼ1頭を見出したに過ぎない。このような点から越冬態の経過は興味あるものと思いが残念ながら今年は産卵を観察する機会に恵まれなかったので冬々の生態を11~3月にわたって調べたいと思っている。詳しいことは今後の廻りに待ちたいと思う。踏見におかれても注意される様御願ひする。なお香瀬郡足守町の間野幹男氏は自宅にラミーを栽培され本種を多量に飼育観察されて居られる由、食草並に越冬について御教示あらば幸甚です。

岡山県下に於ける本種の分布については別に本誌11月号に記すつもりですが果内で本種の採集地を御存知の方は御一報下さい。(12/25-1952稿)

南方紀行(3)

黒田 祐一

東パキスタンのケッタゴン入港を前にして筆者はこの土地に就て少しく説明して置きたい。パキスタンと云う名前はイスラム語で最もノブルな聖なる、尊い、気高いという意味が含まれているとの事で、1947年8月15日が建国独立の日となっている。英国政府は当時印度の二大政黨たる国民會議派と全印度マホメット派と話し合ひの上自由と開放平等の旗印の下に印度から分割独立し、ユニオンパキスタン共和国として誕生したのである。大体宗教争いからの分裂国家であるが開国の8割がマホメット教徒で残りガヒンズー教徒その他である。

面積は360,780平方哩(印・パ大陸の5分の1に当る)で、印度をはさんでイースト・パキスタン、ウエスト・パキスタンと東西1300哩を隔れているという面白い国を形成している。人口は1941年時には7000万位であったが



最近では8000万以上になっている。東パキスタンの方が人口稠密で5万平方哩余りの中に約半分の4000万以上も居るとの事である。

さてケッタゴン港は東パキスタンのカルナフリ河口より約1哩余り離れた所であり、印度より分裂してからベンガル湾に望んだパキスタン唯一の商港としての要衝をなし、西パキスタンにある首府カラチが中央要衝・欧州の内戸であるに對し、本港は極東及び太平洋・印度諸国間との通商に最適の地處を占め、更にカラチ百年の花選史に比し本港は遠く

12世紀アラブ商人と胡椒・米・唐芥子・絹・茶の交易に才で知り得るアジア最古の開港通商史を有しているが18世紀に東印度会社の経済以来英国の殖民地政策によるカルカッタ港の壟断の蔭に陥れて置かるベンガル湾の一古都或いはカルカッタの副港として僅かにその存在が認められているに過ぎなかった。所がパ・印分裂の機に面目を一刷し爾來貨物の轉輸と之にたずる設備の拡充に今日ではパキスタン朝野を纏げて大臺である。戦前は日本船の出入は殆どなく戦後初めて昭和25年11月に第一船が入港して以来次々と英・米・佛・中国・南米諸國の船に混じって出入港している。

2月21日 (木)

カルナフリ河口第2日

7時半頃面白い虫が居るからとキャプテンに起される、ネットを手に被に縮く、サロンの傍に中形の蝶がへばりついていて、早速採集。

晝食後右舷を100匹逆くのトンボが盛に翔びかうのを追う、一度振り損うと暫くは網のとどかぬ海の方へ逃るので損望を要する、やっと4匹とらえる、アキアカキに似ているが腹部や頭部の色彩が大部異っている。

今日も税関吏は来そうもない、果したくひろがつた人家一つ見えたり草原を3哩の向うに眺めながら一体何日待たされるのだろうか。

夕食後艦の方に行ってみると釣好きの船員が又人糸をたれていて、潮の流れが早くて駄目だとの事、今日も権色に濁った大きな太陽が沈みかけている、薄暗くなつた海を次々と帆をつけた漁舟が河口の方に向つて歸つて行く、直ぐいたのを上から見おろすと科底一杯に小さな海老と魚が見られた。

燈火に昨夜に変わらず色々な虫が飛んで来る。

2月22日 (金)

河口第3日

デッキに置かれたサボテンがすっかり死滅よくなり芽をのぞかせていた。

晝過ぎ向うの船に税関のランナーが白旗をたて



てはしつて行つた、こちらへも来るのかと見ていたが来なかつた。

今夜は風の為か虫は居らず、微小甲虫・カメムシの類を少しく採集する。

2月23日(土)

河口第4日

昨夜からの風が今朝もよまずデツギの物陰にシジミ蝶・セセリ蝶等がじつとまっている。あちこちに葎の株にのぞいている一抱え以上もあるペンテレーター(通風筒)の目影の側にヨコバイ・テントウムシ・ハムシ・ゾウムシ・寄生蜂等がとまっている、それをまるで樹液に集つた昆虫もあさる様に一本ずつ見廻る、この様な採集方法が有るとは思わなかつた。

デツギでギヤソナボール・ピンポンに暗くなるまで打壊ずる。

夜も更けるとセイラーの室からバイオリンのギー・ギーという音と時々爆音が起る、今夜も亦荒々の話に花を映かせているらしい、それらも耳にしながら一廻りして中形のスズムシを採集する。

黒電で残篇が何日取空くか分らぬと知らせる。

2月24日(日)

河口第5日

天気はいいが風が強くて何も居ない。射撃の練習をやっているのか時々砲を打つ音が聞えてくる、空に如何にもものんびりと一台の旧式の飛行機が廻っている。

クラークが空の電燈に翔んで来たヒコオロギを一匹もって来てくれる、アオバアリガタハネカクシが一匹とんで来る。

2月25日(月)

河口第6日

10時前ランタが一隻横づけになり、半袖・半パンツの白人が一人タラップを上つて来る、セメントを一部沖取りする爲に連絡に来たのだそうだ、サロンを腰にまとい、上げ背広カシマツを着た10名許りの原住民が後に發つている、マライ人程ではないがさすがに色が黒い、間もなく食事が始まる、炊事係がフライパンの柄を取去つた様な形をしたアルミニウム製の直径40cmもある入物を車座にあぐらを組んだ者の傍に運び出し、それに大鍋よりばさばさとした飯を盛り、その上に

中鍋よりカレー汁らしきものを少しかけて皆にくばる、各自は真中に置かれたバケツよりニエームのゴップに水を汲取りそれに右指を一寸ひたす、そしてそのまま素手でカレーと飯を少しずつ混ぜては口に運ぶ、傍で同じ様に眺めていたクラークが「馴れたものですね」と感心する、平げてしまうと飲み残ったゴップの水をそれに指を洗いながら空け、濡れた指で口をぬぐい、皿をゆすいで終りにする、やがてサロンから出て来たさつきの白人を乗せてランチは去って行つた。

今夜は日本の秋を思わす様にコオロギが一匹キリキリと鳴いている、セイラーがオオスカシバを一羽持って来て呉れる。

2月26日(火)

河口第7日

窓を閉め切り毛布一枚では朝方少し寒い位である、ヤマブチにきれいな虫が居ると起される、サロンの横のもう消えている電燈にアカギガメが一匹とばっていた、黄橙色で黒色斑紋のある大形美麗種だ、珍種とばかりとらえ未だ居るのかと探したがそうは向屋が卸さなかった。

晝過ぎ河から3隻の船が出、それと交代に3隻入って行った。

2月27日(水)

河口第8日

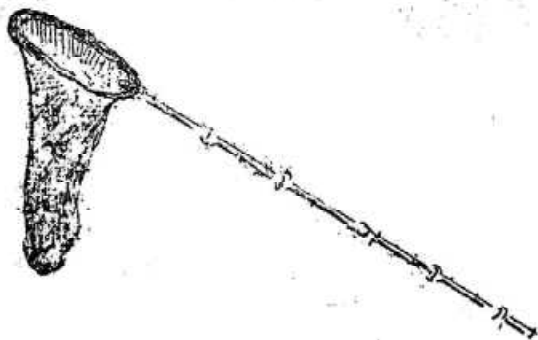
皆退屈なものだからすっかり昆虫熱がうつつて至極好都合なのだ、「ドクター、蝶が、早く、早く」、「ドクター、網をかして下さい」と毎朝の様に皆から起されるのに閉口する。

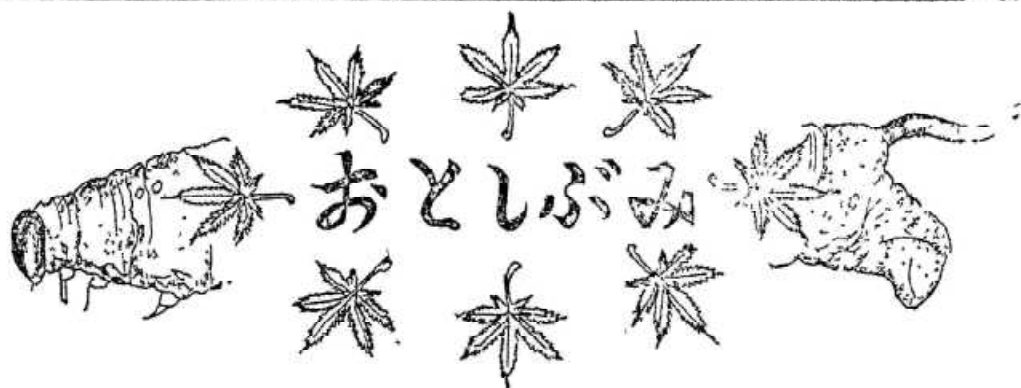
晝前局長さんが窓に蝶が翔んで来たと呼びに来る、天井に近い所にアオバセセリを一周り大きくした位の黒褐色のセセ

リが一羽とまっていた。前翅の表に黄白色の斑紋のある美しい種だった。

明日から荷役が始まるそうだが入港も間もない事だろう。

(續)





Neptis属2種 の訪花資料

1) ホシミスジの訪花資料の紹介：本種の訪花については林慶二郎代著「日本蝶類解説」p.69(1951)に“時には花に集る”とあるのみで新村太郎代「蝶の生活」(1951)にも訪花記録は見られない。私も現在迄本種が花に来ることを観察しておらず、特に本年は注意したのであるが観察出来なかった。とにかゝ本種が花を訪ずれるのは稀なことの様である。私は最近本種の訪花の記録を次から見出したので紹介しておく。小畑太郎言、1940：蝶や蛾の採集と飼育、採集と飼育2-8：284-285 イボタ(白)於赤城山(エボタとあるがイボタの方言と思われる-古屋野代教示)

このイボタにはヒヨウモンやヨウ類その他多数の蝶が集るといふ。本種の訪花を観察された方御知らせ下さい。

2) コミスジの訪花一例：本種もその訪花に就いては「花に時々集る」と前記文献に記されており「蝶の生活」p.15にクマメナギ(白)、イノコヅチ(緑)の2花を寄っているがやはり花に乗ることは少ないらしい。

私は16-11-1952 倉敷市外黒田に於いて本種1♀がゲンゲ(淡紅紫)に籠巣、種かに吸着していたのを観察採集した。後考査に記しておく。

一般にNeptis属の蝶が花を訪ずれることは稀でその訪花記録はわずか2-3を散見するのみである。今後の観察が望まれる。

— 蝶訪花抄(2) — {12-vii-

1952 編了) (広瀬義躬)

ナガサキアゲハ

広島市に産す

先日、広島市の従弟から南国のアゲハニ種が来た。一つは展翅された(と云っても非常に下手である)モンキアゲハと大誤したナガサキアゲハ雄である。後日8月25日に採つたと云うナガサキアゲハ雄の配種個体一頭が又送られて来た。手紙によるとその日ニ種とニ種を見て一雄を採つたのだそうだ。従弟の本州に於ける分布地は山口、島根、大阪、和歌山の各府県だそうで(新昆虫「日本の蝶」による)モンキアゲハの皆通にいる広島のことだからナガサキアゲハもいるだろうと思つていたのでお持ちしたが、一寸がっかりした。昨年お採集したことがあると云う。

採集経験の少ない者でそここれくらい見たり採つたりできるのだから相当沢山産ましているものと思える。採集地は広島市古田町高嶺。採集者水野道男。広島唯一産地であることをお知らせします。

(水野弘造)

トンボがセセリ

キョウ採る

1952、9、6、13時頃塵埃で覆ゆる暑苦しい田舎道(倉敷市老松町)でシオカラトンボ早ガイキモンジセセリをくわえて、あわただしく筆者の頭上を往復していたがやがては道路沿の森に筆者の眼前50cm程の所にとまり、まだ羽の活動は活発であつたが、おもしろにセセリの頭部辺りから食い始め僅く一分程で強いセセリの翅も全く動かなくなつた。トンボがこの森でキョウの内で最も活発なセセリを採つていたのは面白い事である。

(近藤光彦)

金山に多産する
ヤホツゴミムシ

先に本種 *Lebia aclogutta* MORAWITZ が倉敷に産することについては本誌 Vol.2、No.4 に筆者が記録したのであるが去る2月-18、52 岡山市金山に採集を行つたところ頂上附近の主に或樹木(種不明)よりのみ Beating によつて本種多数を得たので報告する。倉敷附近でも稀ならず産す

ると思われる。(20-vii-1952)
(広瀬義躬)

ツロスジコガネ を採集す

先に青野氏が倉敷附近の本種 *Ganida alboliniata* MOTSCHURSKY について本誌 Vol. 2 No. 6 に記されましたが 20/VII, '52 自宅燈火に飛来した本種 1 EX. を筆者が採集した。御参考迄。

(20-VII-'52)

〔追記〕 本個体は腹部の関節で點形片腐蝕管を穿する。筆者の残い知見内にはないことなので御参考迄に記して追記とする。

(広瀬義躬)

ヒカゲチヨウ 燈火に飛来

1952年9月13日、筆者宅=階に於て友野良一君と談話中、21時を過ぎる頃、窓外よりヒカゲチヨウ1只が窓外の電燈に飛来した。当該個体は比較的新鮮且完全であつた。いさゝか珍例と思われるので報告しておく。尚当日の天気は、飛来当時曇であつたが、後に降雨があつた。(小野 洋)

ホシミスジ の蛹化部位

ホシミスジの蛹化は常に茎に於いて行われる。しかし 16/VIII, 1952 倉敷市田之上に於いて筆者弟によりユギヤナギより採集された蛹は葉の裏面の部分に蛹化、葉を葉柄に近い中脈上でこの場合蛹化部分と茎とを糸で結びつけていた。筆者は現在既に多くの本種の蛹化状態を観察して来たがそれからみればこの例は極めて異常な事に属するものである。

本種の蛹化については機会があれば記してみたいと思つている。なお本蛹は 18/VIII 1 早が羽化した。(VIII-20, '52) (広瀬義躬)

観察メモ3題

1) ガガンボの一天敵フンバエ

28/IV, '52 倉敷市田之上の自宅庭内にてフンバエがガガンボ(種不明)をフギの葉上で捕食しているのを筆者弟が観察した。北陸館発行(1950)日本昆虫図鑑 p. 1-651 には本種が小昆虫を食することが記されてある。

2) トンボの共喰一削

25/VII. '52 倉敷市田之上 シ
オカラトンボ合がハグロトンボ合
頭部既に攝食後のもの筆者が観察。

3) シロスジカミキリの自然死

昆虫の自然死と思われものを
野外に於いて我々が観察すること
は少ない。1951年の秋(9月上旬?)

福山へ採集行を試みた際同行の小
野悦次君が茨原峠で路傍の草本の
茎にしつかりしがみついている本
種を採集してがきにとつて見ると
既にことごとき死なものであつた。御
参考也。(VIII-20, '52)

(広瀬義躬)

同好会御紹介

蛾類同志会 お知らせ

本会は昨年5月発会しましたが、業務幹事病氣のため、地方
会員への連絡や会報の発行については今日迄何も行ふことが出来ず、
たゞ東京在住者のみで比較的頻りに談話会を開いて来ましたが、今回
ようやく核熟し、全国的に活発な運動を展開したいと存じますので、
この際同好諸君に下記の事を御愛知頂きたく存じます。

① 蛾類同好者名録の作成 蛾類に興味を有せられる方は(1)
住所(2)姓名(3)職業(4)興味をもつ科、又は研究問題の4項目をハ
ガキで御通知下さい。

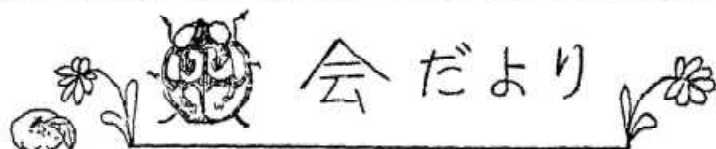
② 蛾類同志会会報の発行 明年1月より年3-4回の予定で
謄写印刷、A5判30頁内外のものを出したく準備しています。蛾に
関する限り大小を問わず、いかなる断片ノートでも御投稿下さい。
(罫の細いものは凸版印刷とし又写真版の挿入も自由に入られます)

○ 第一号原稿メ切 10月末日

東京都大田区入新井 4丁目112 杉方

蛾類同志会

(本部メンバー) 井上 寛 春田俊郎 杉 繁郎
小林 洋、 星野昌哉 中村正直



★ 先月号で皆様にお知らせいたしました発行管理の仕事の交替の件ですが、反対意見の方なく結局青野孝昭氏にこの仕事をやっていたことになりましたので皆様にお知らせしておきます。なにかの具合で会誌を便取られていない方やバックナンバー御入用の御方は同代邸(倉敷市北浜町135)迄、御足労ですが足をお運び下さい。

★ 本会では近く最初の試みといたしまして、会員の研究発表会を開催したいと考えております。期日その他につきましては後程お知らせいたします。ふるって御参加下さいませ。御申込は小野邸まで。現在3名程確定いたしております。

★ 本年最初の年報が出されたわけですが、来月号一月早々に第2号(40~50頁のもの)を出すべく準備しておりますので、皆様におかれましても今から原稿の方を御用意下さいませ様お願いいたします。

★ 本年度分会費をまだ締めおられない方は、そのことが会誌の発行その他会の運営上甚しい支障をきたしますので、その旨御案内の上1ヶ月単位(15日ごと)に分納されても結構ですから、どうか御納入に御努力下さいませ様お願いいたします。
(編集 部)



編集後記

中秋の明月もとつくに
過ぎ去り、ますます燈火親
しむ候の風強く、又日曜ともなれば
山は我々に優く招きかけます。ウ
ラギンジミ亂舞する紅葉の下で枯草
を敷き、心地よい風に吹かれつつ
辨当を唄くのも又格別でございま
す。今月は岡大農学部 安江、小泉

両先生から貴重な報文をいただきました。又黒田先生の南六紀行もますます面白くなつて来るようです。次号が楽しみですね。今月号から表紙をつけてみましたが、いかがですか? 丹精を盛る為には皆様うんと御投稿下さいませよう。では皆様この貴重な紙を有意義にお過ごしいたさすよう。(H.O)

倉敷昆虫同好会

1952



すずむし 第2巻第10号

昭和27年10月27日 印刷

昭和27年10月28日 発行

編集 小野 洋

印刷 小野 洋

発行所 倉敷市新川町

倉敷西小学校理科教室

倉敷昆虫同好会